

# コート・ダジュールのアール・デコと アンリ・プロストの都市計画

三田村 哲哉  
社会環境部門

## Art Deco in the French Riviera and Town Planning by Henri Prost

Tetsuya MITAMURA

School of Human Science and Environment,  
University of Hyogo,  
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

### Abstract:

In 1924, Frank Jay Gould, youngest son of the American railroad king Jay Gould, invested in the construction of the biggest hotel along the beautiful coastline of the smallest city in the French Riviera, "Le Provençal" in Juen-les-pins. In 1929, Joseph Aletti, one of the richest hotel magnates, saw tremendous success with this art deco style hotel, and they undertook the construction project of the most superbly flamboyant casino, "Le Palais de la Méditerranée," along "La promenade des Anglais" in Nice. After their great success with this casino, also an art deco design, many architects constructed various types of buildings with the art deco style in Nice, such as "Le Palais Albert Premier," "Le Sémiramis," "La Couronne," "La Rotonde," "Le Forum," "Gloria Maison," "La Palladium." In addition, many art deco buildings were constructed in a lot of cities in the French Riviera, such as "La Villa Noailles" at Nyères, "L'Hôtel Latitude 43" at Saint-Tropez, "Le Sporting d'hivier" in Monaco, "L'Hôtel Majestec" and the other hotels in Cannes, and Le Casino in Manton.

Keywords: Nice, Canne, Var, Juan-les-pins, Antibes, Hyères

### 序

フランスでは、首都パリに建設されたアール・デコの建築は 1990 年代から研究が進み、一定の研究蓄積がある<sup>1)</sup>。一方、地方都市では各地の大学や美術館、自治体がこれまで地道に進めてきた研究の成果が論文、報告書、パンフレット、ガイドブックなどに掲載されるようになり、地方都市においてもこうした建築が次々に建設された事実が明らかになりつつある。

また当時の建築誌を遡ると、代表作が掲載されていることもあり、近年ようやくフランス国内におけるアール・デコの建築の波及状況が把握できるようになってきた。その中で地中海に面するコート・ダジュールには数多くの傑作の集まっている。本稿は、こうした状況を鑑みて、ニースとジュアン＝レ＝パンを中心にマントン、モナコ、アンティープ、カンヌ、イエールのアール・デコを紹介するものである。

### 1. ジュアン＝レ＝パン

20 世紀初頭にベル・エポックが絶頂期を迎えた後、1914 年に第一次世界大戦が勃発し、1917 年にロシア革命が起きると、イギリスやプロシア、スウェーデン、ロシアの貴族階級が痛手を負い、ニースを中心にコート・ダジュールを避寒地にすることが困難になる。ところが戦後、フランスでは有給休暇や観光旅行、スポーツや海水浴が市民に浸透して、彼らがマントン、ニース、アンティープ、ジュアン＝レ＝パン、カンヌ、イエールなどの浜辺に魅了されるようになった。

市民階級が必要としたのは、貴族階級のための邸館や高級ホテルではなく、身の丈にあった長期滞在の可能な集合住宅である。このようにコート・ダジュールは、明らかに貴族階級から市民階級のための都市が点在するリゾート地に生まれ変わり、そこに新たな建築の需要が生じたのである。

一方、アール・デコ博 (Exposition internationale des arts décoratifs et industriels modernes à Paris 1925) を企画したフランス国家の狙いのひとつは、市民階級が建築、絵画、彫刻のみならず、装飾美術に至る美術全般を楽しむことのできるように波及を促すことであった。換言すれば、フランスではアール・デコは、幅広い層の人々が美術を享受できるような社会を形成するという役割が課されていた。コート・ダジュールでは、建築の需要と様式の狙いが合致したことによって、こうした特徴のある建築が次々に登場したのである。

「狂乱の時代 Les Années Folles」はアメリカばかりでなくフランスにおいても 1920 年からおよそ 10 年弱続き、パリはアール・デコ博のおかげで、後にアール・デコと称されるようになる新たな建築を目にするようになる<sup>2)</sup>。一方、地方都市の場合は都市や地域によって事情が違った。特異な例には、戦火で大聖堂をはじめとする 9 割以上の建築が焼き尽くされたランスでは、博愛主義者で鉄鋼王のアンドリュー・カーネギー (Andrew CARNEGIE: 1835-1919) が公共施設の再建に寄付した。そのうちのひとつ図書館はアール・デコの記念碑に位置付けられており、正面に出資者であるカーネギーの銅像が立つ<sup>3)</sup>。コート・ダジュールの場合も同様で、アール・デコの建築が登場する契機をもたらしたのは、ランスと同じアメリカ資本である。

その舞台になったのは、ニースとカンヌの間の小都市アンティープの端で、1882 年に海水浴場が開設されたばかりの地であった。街外れの小さな湾が西から南に向かって円弧を描くように広がっており、地中海に突き出た半島カップ・ダンティープにまで美しい自然の地形が残っていた。ニースやヴィシーなどのフランスを代表する保養地で数々のホテルを経営し、その成功が称えられて「ホテル業のナポレオン」という異名とったジョゼフ・アレッティ (Joseph ALETTI: 1864-1938) は、1924 年にこの海辺の魅力に魅了されたアメリカの鉄道王ジャイ・グールド (Jay GOULD: 1836-1892) の一番下の息子フランク・ジャイ・グールド (Frank Jay GOULD: 1877-1956) に出資を求めて、中核施設になるホテルの設計競技を開催した。

設計者に選出されたのは、1913 年にローマ賞を受賞し、彫刻家アルフレッド・ジャニオ (Alfred JANNIOT: 1889-1969) とともに、1923 年からニースを代表する記念碑になるロバ＝カプーの墓碑 (Monument aux morts de Rauba-Capeu) を手がけていた地元アンティープ出身の建築家ロジェ・スアサル (Roger SEASSAL: 1885-1967) で、カンヌの建築家リュシアン・スタブル (Lucien



図 1 ル・プロヴァンサル  
1976 年に閉業。現在、後述の集合住宅に生まれ変わったサンメトロベのホテル「ラティテュード 43」と同じように改修が計画されているが、実現に至っていない。

STABLE) とともにホテル「ル・プロヴァンサル Le Provençal」(図 1) を設計した<sup>4)</sup>。1927 年に竣工したホテルは、客室が 290 室という当時のコート・ダジュールで最大級の規模を誇った。敷地が小高い丘の上にあったため、白色の建築は緑色の半島と青色の海から突出してくっきり見えた<sup>5)</sup>。シンメトリーによる建築構成、3 段のセットバック、持ち送りとボウ・ウィンドウの造形、中心の半円形のロトンダや窓枠に設けられたオーダー、細部に施された装飾が特徴で、当時こうした建築こそが、近代主義であると認められていた。そしてル・プロヴァンサルは、後にアール・デコの代表作として捉えられるようになる。

ここは、ニースとカンヌに挟まれた、都市の開発すら全く手つかずの非常に自然の豊かなところであった。いわばそうした空地に突然登場した建築の衝撃は非常に大きく、その周りからアール・デコの建築が次々に建設されるようになった。後述の建築家ジョルジュ・ディカンスキー (Georges DIKANSKY: 1881-1963) が 1927 年にホテル「ジュアナ Juana」、1930 年にホテル「アンバサドゥール Ambassadeur」(図 2)、集合住宅「パレ・ヴィルゾン Palais Wilson」を、カンヌでホテルや集合住宅を手がけた建築家セザール・カヴァラン (César CAVALLIN: 生没年不詳) が 1929 年にホテル「ベル・リヴ Belle-Rives」、1935 年にホテル「パレ・ボ＝リヴァージュ Palais beau-rivage」を建設した。また、別荘も戦前とは明らかに異なっていた。1937 年に建設されたカラヴァンによる別荘「ラ・カラド La Calade」(図 3)、その翌年にアメリカの建築家バリー・ディークス (Barry DIERKS: 1899-1960) による別荘「オジュドゥイ Aujourd'hui」はその一例である<sup>6)</sup>。

こうして小さなリゾート都市ジュアン＝レ＝パンが誕生したのである。そしてアンティープの駅前にもアール・デコの建築が集まり、さらにコート・ダジュールに



点在する都市に波及していった。その中でアレッティとグールドによるリゾート開発はジュアン＝レ＝パンの成功によって拍車がかかり、ニースの地中海宮 (Palais de la Méditerranée) の建設につながったのである<sup>7)</sup>。フランスの作家ジュール・ロマン (Jules ROMANS: 1885-1972) は、小説「善意の人々 Les hommes de bonne volonté」の中で、戦間のフランスが残した2つのものを賞賛しており、後にともにアル・デコの大作として評されるようになった。そのひとつが大型客船ノルマンディー号で、もうひとつが地中海宮である。

スアサルは40才そこそこで、ル・プロヴァンサルを成功させて、後述の通り、1929年にカンヌで、1934年にマントンでそれぞれカジノのほか、数多くの集合住宅や別荘を手がけた。スアサルはこうしたアル・デコの建築が称えられて、建築家・都市計画家アンリ・プロスト (Henri PROST: 1874-1959) の死去後、その翌年に後継者として美術アカデミーの会員に選出されたほどである<sup>8)</sup>。こうして全く何も無い美しい自然の地、ジュアン＝レ＝パンが、コート・ダジュールにおけるアル・デコの波及の起点になったのである。

## 2. ニース

コート・ダジュールの中でアル・デコの建築が最も多く建設された都市は、ジュアン＝レ＝パンのル・プロヴァンサル成功のあとに地中海宮の建設されたニースに違いない。前者の設計に関わるとともに後者の設計者になった建築家シャルル・ダルマス (Charles DALMAS: 1863-1938) と息子マルセル (Marcel DALMAS: 1892-1950) は、1929年に自身のアトリエ (図4) を改修して、正面を新たに整えるところからはじめた。マルセルはそれのみにとどまらず、バルコニーの手すりや付柱の柱頭が示すように、建築家マルセル・ギルゴ (Marcel-Victor GUILGOT: 1901-没年不詳) とともに、1930年に集合住宅「ジュールマン Immeuble Germain」(図5) を、1931年にパレ・アルベール・プルミエ (Palais Albert Premier) (図6) を手がけて、ニースに新たな建築言語を紹介した<sup>9)</sup>。こうした若き建築家の新たな建築造形への挑戦がニースのアル・デコを育てていったのである。

このような試みはダルマス父子のみに止まらない。ディカンスキーもそのひとりで、集合住宅という建築需要と新たな建築造形の創意工夫を組み合わせ、斬新な建築を次々に建設した。ジョルジュは18世紀からニースで建築業を営む一族の出身で、地元の建築には大変精通していた。しかし単にそれだけに満足せず、積極的に先進的な建築造形を試みたため、数多くの仕事が舞い



図2 アンバサドゥール  
(現ホテル「ル・グラン・バヴォワ」)



図3 ラ・カラド



図4 ダルマスのアトリエ兼自邸 細部



図5 ジュルマン 細部



図6 パレ・アルベール・プルミエ



図7 ル・セミラミス 細部



図8 ラ・クロンヌ



図10 パレ・マリ・エ・パレ・ジョフル



図9 ラ・ロトンダ



込んだ。それは最初期に手がけた 1926 年の集合住宅「ル・セミラミス Le Sémiramis」(図 7) の立面に見られるように、アレンジされた古典主義の建築言語、屋上のパーゴラ、最上階の壁面に施された美しい花柄のモザイクタイルに集約されている。1927 年の集合住宅「ラ・クロンヌ La Couronne」(図 8) では、屋根裏階の下に位置するアーチ型の窓の周りに花柄のモザイクタイルを取り入れただけではなく、1928 年の代表作集合住宅「ラ・ロトンダ La Rotonde」(図 9) は曲面の立面全体にボウ・ウィンドウを設けて、立体感を与えるとともに、最上階および屋根裏階の上部に花柄のモザイクタイルを取り入れて、ペント・ハウスにパーゴラを整えた。1929 年の集合住宅「ル・パレ・マリ・エ・パレ・ジョフル Le Palais Marie et Palais Joffre」(図 10) では、パーゴラは継承しつつ、最上階のモザイク・タイルを浅浮彫りに変更するとともに、ニッチや付柱の形状を変えて新たな立面を形作った。自らが生み出した旧来の建築言語と作品毎に考案した新たな要素を組み合わせることによって自らの作品を徐々に進化させていったのである。さらに 1932 年の集合住宅「ル・フォーラム Le Forum」(図 11) では、立面はプロムナード・デ・ザングレに向かって軸線対称となるように構成されるとともに、バルコニーの形状も部分に段状の構成を取り入れながら、全体がそれらに合わせて形成された。

ディカンスキーは 1920 年代の中頃からアール・デコの建築に取り組み、戦後作風を大きく変えながら、ニースに 12 棟の集合住宅を残した。その彼を追うように登場したのが若手の建築家ルネ・リヴィエリ (René LIVIERI; 1908-1995) である<sup>10)</sup>。リヴィエリはニース国立装飾美術学校でシャルル・ダルマスに建築を学んだ後、1920 年代後半にパリの建築事務所を点々として、建築の素養を養ったとされる異色の経歴の持ち主である。1932 年、弱冠 24 歳で手がけた処女作、集合住宅「レ・ナルシス Les narcisses」と「レ・ヴィオレット Les violettes」(図 12) は、ディカンスキーの花柄モザイクタイルを模倣したものに過ぎなかったが、リヴィエリは翌年の集合住宅「パレ・アラボ Palais Arabo」(図 13) から、建築の隅切りに工夫を凝らすことによって、新たな形の建築を次々に生み出した。正面が隅に設けられた建築は、アール・ヌーヴォーのホテル「ネグレスコ Negresco」のように、ベル・エポックの建築にもみられるが、リヴィエリの作品は集合住宅というビルディング・タイプの特徴を活かして、全く新しい造形を生み出した。1935 年の集合住宅「エリオス・エ・ベル・アズール」(図 14) では、隅の大型ボウ・ウィンドウとセット



図 11 ル・フォーラム



図 12 レ・ナルシス



図 13 パレ・アラボ



図 14 エリオス・エ・ベル・アズール



図 15 レ・ミモサス

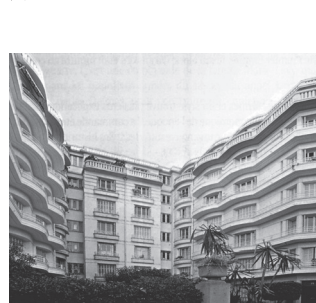


図 16 ラ・レジダンス



図 17 マジェンタ



図 18 ル・コリゼ



バックする塔、1938年の集合住宅「レ・ミモサス」(図15)では、滑らかに流れる曲線をモチーフとしたバルコニーに特徴が現れた。1939年の代表作である集合住宅「ラ・レジダンス La Residence」(図16)は、トロントの「ローディトリウム L'Auditorium」(1930)やモントリオールのレストラン「イートン Eaton」で、カナダにアール・デコの建築を紹介した実績のあるフランスの建築家ジャック・カルリュエ(Jacques CARLU: 1890-1976)との協働の経験を活かして、パリのシャイヨー宮(Palais de Chaillot)前の庭園を想起させるような中庭をコの字型に取り囲むように建設したもので、この中庭に面するバルコニーが、大変独特な直線と曲線によって構成された。

アルメニア系トルコ人の建築家ガラブ・オヴナニアン(Garabed HOVNANIAN: 1895-1970)も、集合住宅の建築造形に新たな試みを取り入れたひとりである<sup>11)</sup>。1927年に手がけた商店「G. コル G. KOHL」や1929年の集合住宅「マジェンタ Palais Magenta」(図17)の後、1930年の代表作の集合住宅「ル・コリゼ Le Colisée」(図18)と1934年の集合住宅「グロリア・メゾン Gloria Maison」(図19)を手がけた。前者は、隅切りの上部に簡易の破風を設けるとともに、持送りで上階を突出させた部分と曲面を描くバルコニーによって立面を構成した建築で、さらに滑らかな形状のバルコニーが取り入れられたのが後者の集合住宅である。

オヴナニアンはニースの新たな集合住宅の需要を検討して、ニューヨークで1900年から1910年にかけて数多く建設された「アパート=ホテル」をモデルにこれらの作品を手がけたという。また「グロリア・メゾン」はもともと1924年にシャルル・ダルマスに依頼された仕事であったが、その後オヴナニアンに回ってきたもので、1931年に建築家ウィリアム・ヴァン・アレン(William Van Alen: 1883-1954)によって設計されたニューヨークのアール・デコの傑作クライスラー・タワー(Chrysler Building)のゴーガイル(ひばし)と同じように、鷲のような猛禽を取り付けて、アメリカの不動産会社を持ち上げてみせた。

ディカンスキーらのほか、地元ニースの建築家ガストン・ネノ(Gaston NÉNOT: 生没年不詳)も、1922年にローマ賞次席1等を受賞した建築家ポール・ラッベ(Paul LABBÉ: 1892-1943)とともにニースにアール・デコの集合住宅を残した<sup>12)</sup>。その中でも傑作は1930年の「ル・パツラティウム La Palladium」である(図20)。正面ばかりでなく、いずれの立面もシンメトリーになるように、曲面や凹凸、ボウ・ウィンドウやベランダなどの多



図19 グロリア・メゾン



図20 ル・パツラティウム



図23 イタリア商業銀行



図21 ティエール郵便局



図22 サント=ジャンヌ=ダルク教会堂

彩な要素が垂直方向に並べられ、実に表情豊かな建築にまとまっている。

このようにニースでは集合住宅のみならず、このほかにも実にさまざまな建築にアール・デコが採用されたことがわかる。映画館「パレ・レスキュリアル Palais L'Escurial」は、トルコ出身の建築家レオナルド・ヴァルタリティ(Léonard VARTHALITY: 1881-1966)によって1935年に建設されたもので、段状に構成された曲面の正面と館内の装飾に特徴の現れた<sup>13)</sup>。建築家ギオーム・トロンシュ(Guillaume TRONCHET: 1867-1959)<sup>14)</sup>による1931年のティエール郵便局(図21)は、ニースでは稀有な外壁がレンガ造の建築で、隅切りの施された正面に塔が配置されるとともに、幾何学紋様の装飾に特徴が見られる。

また外務省技術顧問を務める建築家フロレスターノ・ディ・ファウスト(Florestano Di Fausto: 1890-1965)による1932年のイタリア領事館(Le Consulat Général de Italie)のほか、アール・デコ博でフランス村の礼

拝堂を手がけた建築家ジャック・ドローズ (Jacques DROZ: 1882-1955) による 1933 年のサント＝ジャンヌ＝ダルク教会堂 (Église Sainte-Jeanne-d'Arc) (図 22) は、教会堂建築の新たな建築造形が試みられた作品である。9つの卵型をペンデンティブ・ドームのように組み合わせることによって全体が構成されていた。1923年に建築家オーギュスト・ペレ (Auguste PERRET: 1874-1954) はル・ランシーの教会堂 (Église Notre-Dame du Raincy) で、この規模の教会堂建築の全く新たな形態を模索した。ドローズのサント＝ジャンヌ＝ダルク教会堂も建築の形態を根本から問い直す試みであった。

一方、室内装飾も盛んであった。アール・デコ博に看過された建築・装飾家クレマン・ゴユネシュ (Clément GOYENÈCHE: 1893-1984) は 1931年に、1750年に建設された市庁舎の階段室、中央ホール、議会室、市長室の改修を手がけて、古典主義とアール・デコが共存・共栄する建築を生み出した。また、イタリア商業銀行ニース支店 (La Banca Commerciale Italiana à Nice) は 1933年にダルマス父子による作品で、アール・デコの室内装飾を代表する作品であった (図 23)<sup>15)</sup>。ニースでは、ル・プロヴァンサルと地中海宮の成功の後、実に多くの建築家がこのような形で次々にアール・デコの作品を手がけたのである。

### 3. コート・ダジュールの開発

19世紀末から20世紀初頭のフランスでは、都市の「保全」と「開発」に対する関心が高まり、1906年に「景観保護」に関する法案が提出された<sup>16)</sup>。こうした関心に基づいた検討は国ばかりでなく地方でも重ねられた。戦後間もない1919年に「都市と交通の拡張と開発の計画」に関する法案が成立して、フランスは都市政策を促進することになる<sup>17)</sup>。つまりこれが19世紀パリを中心に検討されていた都市の開発と拡張という政策がフランス全土で検討される契機になった。

ヴァール県知事のテオフィル・バルニエ (Théophile BARNIER: 1882-1963) は、この機会を見事に利用して、世界的に名高いコート・ダジュールのリゾート開発の原点となる都市計画を、フランスで最も美しいとされるその中心部の約200kmの海岸線で実施した立役者である<sup>18)</sup>。これまでフランスの都市政策は、地方自治体単位で検討されることが多く、自治体同士の連携が困難であった。バルニエはこうした状況を鑑みて「美しい自然の保護と活力のある都市の開発<sup>19)</sup>」を主眼として、コート・ダジュール、つまりマルセイユの東に位置するカシから、フランスとイタリアの間の国境の西に位置するマン

トンに至る地中海沿岸地方の中でも、その中心に位置する、東がカヌの西のサン＝ラファエル、西がカシの東のサン・シルまでの26の地方自治体<sup>20)</sup>をまとめ上げて、ヴァール県・市町村自治体連絡協議会を結成し、国土開発に匹敵する規模の都市計画に取り組んだ。そしてバルニエはモロッコ初代総督ユベール・リョテ (Louis-Hubert-Gonzalve LYAUTEY: 1854-1934) にヴァール県コート・ダジュールの保護・開発計画を説明して、リョテが紹介したプロストが具体案の作成にあたることになった (図 24)。

1922年にヴァール県に入り、現地調査を行ったプロストは、当時の海岸線を「未開 sauvage」と表現している<sup>21)</sup>。プロストが描いたのは、この豊かな自然とその景観を保全しつつ、普及拡大の進む自動車に合わせて、将来を見据えた建築計画と合わせた道路網の充実で、これがフランス随一のリゾート地開発の原点になった。この計画案は、コート・ダジュールが未開の自然から将来リゾート地に整備されることを意味したもので、後の大きな建築需要につながることを知った建築家たちは競い合うように、パリからも続々と集まった。プロストは、こうしてヴァール県のみならずコート・ダジュールに数多くのアール・デコの建築が生まれる契機を作ったのである。

その先陣を切ったのが、1923年6月25日にイエールの小高い丘の上に、芸術家の庇護者であるノアイユ子爵夫妻 (Charles de Noailles: 1891-1981, Marie-Laure de Noailles: 1902-1970) から新居の提案を依頼された建築家ロベール・マレ＝ステヴァンス (Robert MALLET-STEVENS: 1886-1945) である (図 25)<sup>22)</sup>。子爵はアール・デコ博でさまざまな芸術家、特にピエール・シャロー (Pierre CHAVEAU: 1883-1950) に関心を持ち、家具を発注すると同時に、マレ＝ステヴァンスにも共感を抱いていたという<sup>22)</sup>。これは冬を越すための別荘で、希望は近代主義の建築であった<sup>23)</sup>。マレ＝ステヴァンスは翌月5日に近代主義の建築を目指す由を記した言葉とともに最初の案を示した<sup>24)</sup>。

ノアイユ邸 (Villa Noailles) は1924年1月に示された案 (図 26) によると、1927年のサン＝ジャン＝ド＝リュズのカジノ (Casino de Saint-Jean-de-Luz) や、1929年にルーベ郊外に建設されたカヴロワ邸 (Villa Cavrois)、1934年パリに建設されたマレ＝ステヴァンス通りの集合住宅 (Hôtels particuliers bordant la rue Mallet-Stevens) と同様に、積み木を組み合わせたような新たな形の近代建築で、こうした試みを先駆けて実現させた作品であった<sup>25)</sup>。邸宅内には食堂 (図 27) や居



間に加えて、執務室(図28)からプール(図29)、スポーツ・ジムに至るまで完備されており、この建築の形が当時フランス国内において、最も先進的な試みであると考えられていた<sup>26)</sup>。

マレ＝ステヴァンスの回りにはフランシス・ジュルダン(Francis JOURDAIN, 1876-1958)、建築家・装飾家アイリーン・グレイ(Eileen GRAY: 1878-1976)、シャロー、シーボルド・ファン・ラフェステイン(Seybold VAN RAVESTEYN: 1889-1983)、ジョルジュ・ディジョ＝ブルジョワ(Georges DJO-BOURGEOIS: 1898-1937)、マルセル・ブロイヤー(Marcel BREUER: 1902-1981)、装飾家ルネ・プル(René PROU: 1889-1947)、ガラス工芸家レイ・バリレ(Louis BARILLET: 1880-1948)とジャン・ペルゼル(Jean PERZEL: 1892-1986)、建築家ガブリエル・グエヴレキアン(Gabriel GUÉVRÉKIAN: 1892-1970)、画家テオ・ヴァン・ドゥースブルク(Théo VAN DOESBURG: 1883-1931)とラウル・デュフィ(Raoul DUFY: 1877-1953)、彫刻家ジャック・リップシツ(Jacques LIPCHITZ: 1891-1973)、アンリ・ロラン(Henri LAURENS: 1885-1954)、マルテル兄弟(Jan MARTEL: 1896-1966, Joël MARTEL)、金銀細工士シャルル・リノシエ(Charles LINOSSIER)のみならずこのほかにもオランダ、トルコ、アイルランド、ハンガリー、ロシアから若い芸術家が集まった<sup>27)</sup>。

1928年に竣工した邸宅には、まず建築家グエヴレキアンによる幾何学式庭園(図30)が整備された。これはマレ＝ステヴァンスによるアル・デコ博の庭園「水と光」に倣ったもので、提案は1927年サロン・ドートンヌに出展された模型によって示された<sup>28)</sup>。居間「薔薇」の彫刻はキュビズムの彫刻家リップシツによる作品である。また玄関の扉はリノシエが、柱の浅浮彫りはキュビズムのロランが考えたものであった。さらにシャローは屋上の半屋外部屋を考案し、ベッドを天井から吊って見せた(図31)。バリレは階段室のステンド・ガラスや居間「薔薇」の天井のガラス細工を手がけた。ドゥースブルクは小さな花の間とその準備室の色彩を検討し、ラフェステインが2階客間の家具をデザインして、デ・スティールの特徴を取り入れた。そしてディジョ＝ブルジョワは、食堂の家具や居間の書棚を検討したという具合である。またプルは暖炉を手がけ、ジュルダン、シャロー、20代の若きブロイヤーの家具が持ち込まれ、パリに事務所を構えたばかりの建築家・装飾家グレイの絨毯、気鋭の若手ガラス細工師ペルゼルによる照明器具、フォーヴィスムの画家デュフィによる絵柄の織物が取り入れら



図24 ヴァール県コートダジュールの保護・開発計画案、プロスト、1923年3月17日。



図25 ノアイユ邸

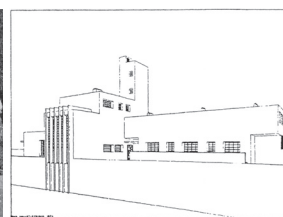


図26 ノアイユ邸 1924年案



図27 ノアイユ邸 食堂



図28 ノアイユ邸 アトリエ



図29 ノアイユ邸 プール



図30 ノアイユ邸 庭園



図31 ノアイユ邸 テラス



図32 ラティエド43



図33 スポルティグ・ディヴィエール



図34 ミラマール



図35 マジスティック

れたという。こうしてアール・デコの時代、コート・ダジュールの近代建築に多大な影響を与えたノワイユ邸が、その最初期に建設されたのである。

この後、ノワイユ邸に続くように別荘をはじめとするリゾート施設が次々に建設された。シャローは 1927 年にボヴァロンにゴルフ場クラブハウス (Club House du golf de Beauvallon) を、翌年アヴァルの風の別荘 (Villa Vent d'Aval) を建設した<sup>29)</sup>。トロンシュが 1925 年に建設した別荘「ル・レオル Le Rayollet」は地方主義建築であったが、ル・コルビュジエ (Le Corbusier, 1887-1965) が 1932 年に建設したド・マンドロ邸 (Villa de Mandrot) は、テラスに向かって平面が L 字型の前者とは対照的な近代建築であった。

ノアイユ邸に続いてさらなる火付け役が登場した。1932 年に大型のホテル「ラティテュド 43 Latitude 43」(図 32) を建設した建築家ジョルジュ＝アンリ・パンギュソン (Georges-Henri PINGUSSON, 1894-1978) である<sup>30)</sup>。サン＝トロペの旧市街から西側の広大な敷地に、バンガローやテニスコート、温水プール、カジノなどの施設がすべてそろったリゾート施設が計画されて、パンギュソンが担当したのが小高い丘の上に建設された大型施設のホテルであった<sup>31)</sup>。110 室の客室に対して 300 席のレストランが用意され、そのうち 100 席がパティオ席であったという。高台から真北にサン＝トロペ湾、地中海を望める数少ない地形を活かした計画で、湾を挟んで向かい側のサン＝マキシムは光景は絶景である。

図面が揃ったのが 1931 年 10 月 19 日で、工期が翌年 1 月末から年内いっぱいまでというたった 1 年未満という短期間で建設された<sup>32)</sup>。このホテルも、クレマン＝フェラン出てきてパリ国立美術学校に建築を学んだ建築家による作品で、パンギュソンは近代主義の建築を牽引する者のひとりとして国際的に認められるようになった<sup>33)</sup>。小さな港町のはずれに突然出現した建築の衝撃は、ジュアン＝レ＝パンのル・プロヴァンサルの登場によく似ていた。しかし建築造形は明らかに異なった。ラティテュド 43 は、戦間の建築の大きな動向である国際様式、合理主義、機能主義、アール・デコの中で生まれたもので、海面から丘に突出した建築は大型客船のように見えることから客船様式の代表作のひとつとして捉えられている。

コート・ダジュールの近隣都市に転じてみると、同時代にアール・デコの建築が次々に建設されたことがわかる。建築家シャルル・レトロヌ (Charles LETROSNE: 1868-1939) によるスポルティング・ディ



図 36 マルティエヌ



図 37 マントンのカジノ

ヴィエール (Sporting d'hivier) (2016 年破壊) はカジノ、展示室、劇場、レストランからなる複合施設で、シャルル・ガルニエ (Charles GARNIER: 1825-1898) によるモンテ＝カルロのカジノ (Casino de Monte-Carlo) の北側に広がる広場に面して、1891 年に建築家ジュール・トゥゼ (Jules TOUZET: 1850-1914) によって建設された鉄骨造のガラス建築に替わって、1931 年に建てられたもので、立面は付柱をはじめとする装飾に至るまで、シャンゼリゼ劇場 (Théâtre des Champs-Élysées) に多くの類似点が指摘された (図 33)。

一方、カンヌでは 3 棟の大型ホテルが次々に建設された。1927 年に地中海宮を手がけた建築家シャルル・ダルマスがホテル「ミラマ Miramar」(図 34) を手がけた後、ホテル「マジェスティック Majestic」(図 35) は、ノルマンディー地方の都市ドーヴィルのホテル「ル・ノルマンディー Le Normandy」を手がけた建築家テオ・プティ (Théo Petit) が晩年の 1923 年から 3 年間をかけて、海岸線に沿うクロワゼット通り面して翼棟を建設した後、1928 年にローマ賞受賞者の建築家シャルル・ニコ (Charles NICOD: 1878-1967) とエミール・モリニエ (Émile MOLINIÉ: 1877-1964) が完成させたものである。持送りで支持された立面全体に連続するボウ・ウィンドウと上層部に連続する彫刻は、ニースの集合住宅に見られる共通点である。

1928 年にニースの集合住宅「コンコルディア Condordia」を手がけた建築家シャルル・パルムロ (Charles PALMERO: 生没年不詳)、ピエール・ヴェヌヴオ (Pierre VEUNEVOT: 同上)、ウォーリング・アンド・ジロ (Waring and Gillot: 同上) は、1929 年に大型ホテル「マルティエヌ Martinez」を建設した (図 36)。マルティエヌは地中海に面する正面を中心に、街区を形成するように構成された建築で、三層の構成、ボウ・ウィンドウ、ベランダに工夫を凝らした立面に特徴が現れた。カンヌでは、この時代に複数の大型ホテルが建設されて、それらのいずれもアール・デコの建築であった。コート・ダジュールにこれほどまでに複数のアール・デコの大型ホテルが建設された都市はない。

こうした建築は、コート・ダジュールの最東端に位置するマントンにも次々に建設された。その代表は、1934 年に海岸線に沿って建設されたスアサルによるカ



ジノ (Casino de Menton) である (図 37)。スアサルは 1929 年にカンヌのクロワゼット岬の先端に面した低層のパルム・ビーチ・カジノ (Palm Beach Casino) を建設した。ニースの地中海宮のような高層のとは明らかに異なる形の建築であった。マントンのカジノの敷地も海岸線に沿った一画で、複数棟からなる建築構成、海岸線に面したテラス、半円形のロトンダ、オーダーの新たな建築造形、アーチによる回廊、外壁面に施された菱形紋様、屋根上部に施された塔状の装飾がカンヌのカジノから継承された。

マントンの場合、建築だけではなかった。そのひとつは 1928 年に駅舎の向かい側に建設された戦没者記念碑 (Monument aux morts de Menton) で、建築家ポール・トゥルノン (Paul TOURNON: 1881-1964) と、建築家ガストン・カステル (Gaston CASTEL: 1886-1971) とともにマルセイユを中心にアール・デコの作品を数多く残した彫刻家アントワーヌ・サルトリオ (Antoine SARTORIO: 1885-1988) による作品である。8 角形の台座の上に建てられたオーダー、オーダー周りの装飾、その周囲に配置された照明器具に特徴が見られる。

このようにイエールからマントンに至るコート・ダジュールでは、アメリカ資本の到来、ホテル業成功者の参入、リゾート開発のための都市計画によって、ニースやカンヌのような大都市のみにとどまらず、ジュアン＝レ＝パンやサン＝トロペのような小都市にも、アール・デコの建築が波及したのである。

## 結

大西洋岸では、アール・デコの建築はビアリッツを中心としたバイヨンヌから南のシブールに至るバスク地方の小都市と、ドーヴィルなどのノルマンディー地方にそれぞれ建設された。バスク地方では、その影響は内陸の温泉地ダックスからポーにも及び、ビルディング・タイプではカジノが多く、別荘も建設されたが、その中には博物館ある。

コート・ダジュールとバスク地方の違いは、アメリカ資本の有無と都市計画である。コート・ダジュールでは、こうした新たな投資に基づいたル・プロヴァンサルと地中海宮の成功がアール・デコの波及に大きな契機になり、プロストの広大な都市計画に基づいたリゾート開発がさらなる建築需要を生み出して、大都市のみならず小都市にも、こうした建築が次々に建設された。バスク地方のように都市間の競争原理のみならず、経済原理と開発計画が加わったことによって、コート・ダジュールにはより多くのアール・デコの建築が建てられたのである。

マルセイユではパリに建築を学んだ地元の建築家ガストン・カステル (Gaston CASTEL: 1886-1971) がアール・デコの波及に一躍買ったように、コート・ダジュールではスアサルやマルセル・ダルマスがその役割を担うにとどまらず、両者に続いて次々にアール・デコの作品を手がける建築家が登場した。さらにパリから建築家が集まり、大作を残したため、アール・デコの建築が点在する海岸線が形成されたのである。

## 註

- 1) PLUM (Gilles), *Paris art déco, immeubles, monuments et maisons de l'entre-les-guerres, 1918-1940*, Paris: Parigramme, 2008.  
LARBODIÈRE, (Jean-Marc), *Paris art déco, l'architecture des années 20*, Paris: Massin, 2008.  
吉田鋼市「パリのアール・デコの建築について」『日本建築学会大会学術講演梗概集 F 都市計画、建築経済、住宅問題、建築歴史・意匠』日本建築学会、1992 年、1283-1284 頁。
- 2) 拙著『アール・デコ博建築造形論』中央公論美術出版、2010 年。
- 3) 拙論「ランスのアール・デコ」『建築史学』建築史学会、第 53 号、2009 年 9 月、84-94 頁。
- 4) Archives, Cité de l'architecture & du patrimoine, Fonds Bétons armés Hennebique, 076Ifa2258/3.  
スタブルはカンヌのホテル「ジョルジュ・サンク Georges V」(1929 年) (現・グラン・パレ) のほか、カンヌを中心にニースやグラス、ヴァラウリス、テウル＝スール＝メールなどに数多くの別荘を建設した建築家である。
- 5) BEUDON (Françoise-Albane), *David Dellepiane, peintre, affichiste, illustrateur*, Marseille: Parenthèses, 1999, p.108.
- 6) ディークスはカーネギー工科大学を卒業後、パリの国立美術学校でレオン・ジョスリー (Léon JAUSSELY: 1875-1932) に建築を学び、1925 年からカンヌやアンティープを中心に 100 棟以上の別荘を手がけた。  
FRAY (François), "La clientèle de l'architecte Barry Dierks sur la Côte d'Azur", *In site, revue des patrimoines*, Paris, no.4, 2004.
- 7) 拙論『「地中海宮」のアール・デコ』『地中海学会会報 334』、2010 年 9 月号。
- 8) プロストは 1902 年にローマ賞を受賞後、アントウェルペン (1910 年)、モロッコの 15 都市 (1914-23 年)、ヴァール県コート・ダジュール (1922-39)、イズミール (1926)、メッス (1927-30 年)、パリ地域圏 (1928-34)、

- イスタンブール (1935-50) において建築と都市計画を手がけて多大な功績を残した。建築の代表作にはマラケシュのホテル「マムーニヤ」(1920-39)がある。
- 9) ギルゴは 20 世紀初頭ロシアのエカテリナスラブから移住後、1913年にパリの建築専門学校を卒業し、1920年にニースに移住して、アール・デコの建築を残した。
- 10) Anonyme, *René Livieri, 1908-1955*, [cat.exp., janvier à mars 2008, à Forum urbanisme architecture], Nice: Forum urbanisme architecture, 2008.
- 11) オヴナニアンはコンスタンティノーブル (現イスタンブール) の大学で建築を学び、1918年に家族でニースに移住して、アール・デコの建築を残した。1932年に渡米。
- 12) ネノはラッベとともにニースに 1932年にベルニエール通りの集合住宅と 1935年にスツソール通りの集合住宅の後、1938年にモナコに集合住宅「オペセルヴァトワール・パレス」を建設した。
- 13) ヴァルタリティはローマで建築を学んだ後、グロリア・メゾンの設計者オヴナニアンに建築を学んだケヴォルク・アルスニアン (Kevork ARSENIAN: 1898-1980) と協働で、このほかにもアンティープの集合住宅「ル・パレ・ドレ」(1926)、ニースの集合住宅「ル・グラン・パレ」(1926)、同「ル・ジャン＝ジャック・ムカティ」(1939)を手がけた。パレ・レスコリアルは 1980年頃閉業し、2012年にスーパーマーケットに改修された。
- 14) トロンシュは建築家ヴィクトル・ラルー (Victor LALOUX: 1850-1937) に建築を学び、1892年にローマ賞次席 2 等を受賞した後、1900年パリ万国博覧会で 3 棟の展示館、アール・デコ博でアストウリアス炭坑会社館を手がけた。
- 15) イタリア商業銀行ニース支店は現存せず。C.M., "La Banca Commerciale Italiana à Nice", *La construction moderne*, Paris, 28 mai 1933, pp.578-522.
- 16) Loi du 21 avril 1906, sur la protection des sites.
- 17) Loi du 14 mars 1919, concernant les plans d'extension et d'aménagement des villes, et circulations.
- 18) BARNIER (Th.), "Côte d'Azur varoise", *L'œuvre de Henri Prost, architecture et urbanisme*, Paris: Académie d'architecture, 1960, pp.121-141.
- 19) PROST (Henri), *Syndicat des communes de la Côte d'Azur varoise, Projets d'aménagement 17 mars 1923, 1923*. 14Fi1à113, Archives départemental du Var à Draguignan.  
拙論「アンリ・プロストによるヴァール県コート・ダジュールの保護・開発計画案」『日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠』日本建築学会、2015年、539-540頁。
- 20) 26の自治体は Saint Raphaël, Fréjus, Puget-sur-Argens, Roquebrune, Sainte Maxime, Plande-la-Tour, Grimaud, Garde-Freinet, Cogolin, Saint Tropez, Gassin, Ramatuelle, La Môle, Lavandou, Bormes, La Londe-les-Maures, Hyères, Carqueiranne, Pradet, La Garde, Toulon, La Seyne, Six-Fours, Sanary, Bandol, Saint Cyr である。
- 21) GEORGES-RISLER (Manier), "Travaux des Séctions, Séction d'hygiène urbaine & rurale & de prévoyance sociale", *Le Musée social*, année 1925, Paris, 1925, pp.109-110.
- 22) Anonyme, "Rob. Mallet-Stevens", *L'Architecture d'aujourd'hui*, Paris, no.8-16, 1931, p.100.  
Anonyme, "Rob. Mallet-Stevens", *L'Architecture d'aujourd'hui*, Paris, no.1-22, 1933, p.106.
- 22) KLEIN (Richard), *Hector Guimard, Robert Mallet-Stevens, Villa modernes*, Paris: CNDP, 2005, pp.37-38.
- 23) LYONNET (Jean-Pierre), *Robert Mallet-Stevens architecte*, Paris : Éditions 15 square de Vergennes, 2005, pp.98-102.
- 24) CINQUALBRE (Olivier), *Robert Mallet-Stevens, l'œuvre complète*, [cat.exp., 27 avril au 29 août 2005 à Centre Pompidou], Paris: Centre Pompidou, 2005, p.103.
- 25) Centre national d'art et de culture Georges Pompidou, *Robert Mallet-Stevens: l'œuvre complète*, Paris, Centre Pompidou, 2005, pp.103-107.
- 26) BARRÉ-DESPOND (Arlette), *Jourdain: Frantz, 1847-1935, Francis, 1876-1958, Frantz-Philippe, 1906*, Paris: Regard, 1988, pp.280-281.
- 27) KLEIN (Richard), *Robert Mallet-Stevens, agir pour l'architecture moderne*, Paris: Édition du patrimoine, 2014, pp.52-55.
- 28) VITOU (Élisabeth), DESHOULIÈRES (Dominique), JEANNEAU (Hubert), *Gabriel Guévrekian, une autre architecture moderne*, Paris: Connivences, 1987, pp.34-38.
- 29) こうした近代建築がヴァール県コート・ダジュールに数多く建設されるようになる。それらは次に詳しい。BARTOLI(Pascale), BONILLO (Jean-Lucien), *L'architecture au XXème siècle dans le Var, La patrimoine labellisé et protégé*, Marseille: Imbernon, 2010.
- 30) PINGUSSON (Georges-Henri), "Un Hôtel à St.-Tropez, Latitude 43", *L'Architecture d'aujourd'hui*, Paris, no.9-3,



1932, pp.2-22.

- 31) Anonyme, "Groupe Touristique, Latitude 43 à Saint-Tropez", *L'Architecte*, Paris, no.1, 1933, pp.2-10.  
 32) TEXIER (Simon), *Georges-Henri Pingusson, architecte, 1894-1978*, Paris: Verdier, 2006, pp70-72.  
 33) Collectif, *Georges-Henri Pingusson, architecte: L'oeuvre lorraine*, Metz: Serpenoise, 2000, p.2.

図版出典

- 図 1-3 筆者撮影。  
 図 4. STÈVE (Michel), *L'architecture à Nice 1920-40*, Nice: Serre, 2002, p.37.  
 図 5. Idem, p.104. 図 6. Idem, p.132. 図 7. Idem, p.36.  
 図 8. Idem, p.42. 図 9. 筆者撮影。  
 図 10. Anonyme, *Nice, quand la ville protège ses constructions*, [cat.exp., 27 juin à 29 septembre 2007, à Forum urbanisme architecture], Nice: Forum urbanisme architecture, 2007, p.28.  
 図 11. 筆者撮影。 図 12. STÈVE (Michel), op.cit., p.144.  
 図 13. Anonyme, op.cit., 10), p.13.  
 図 14. Idem,p.14. 図 15. Idem,p.15. 図 16. Idem, p.16.  
 図 17. STÈVE (Michel), op.cit., p.78. 図 18. Idem, p.106.  
 図 19-22. 筆者撮影。 図 23.C.M., op.cit., 15), p.518.  
 図 24. PROST (Henri), op.cit., 19).  
 図 25. 筆者撮影。  
 図 26. CINQUALBRE (Olivier), op.cit., 24), p.103.  
 図 27. LYONNET (Jean-Pierre), *Robert Mallet-Stevens, architecte*, Paris: 15 square de Vergennes, 2005, p.107.  
 図 28. Idem, p.104.  
 図 29. CINQUALBRE (Olivier), op.cit., p.107.  
 図 30. 筆者撮影。  
 図 31. LYONNET (Jean-Pierre), op.cit., p.101.  
 図 32-37. 筆者撮影。

謝辞

本稿は次の研究助成に基づいた研究成果の一部である。  
 科研費・基盤研究 (C) 「フランスにおけるアンリ・プロストの都市計画とミュゼ・ソシアルの役割に関する研究」研究課題:26420646。平成 26-27 年 (公益財団法人) LIXIL 住生活財団調査研究助成「地中海沿岸国のアー・デコ建築に関する調査研究」。平成 23-24 年 (財団法人) トステム建材産業振興財団研究助成「フランスにおけるアー・デコ様式の居住施設に関する意匠研究」。

(平成28年 8 月17日 受付)